

## 長町無題

寺 閑一

二六号の「貧天地、寒窓探検記」を読んだ。ガリ版の字は、老の目に一寸読辛かったが、拡大鏡の世話になり、興味深く拜見した。

と言うのは、子供の頃、私は日本橋筋五丁目に住んでいた。隣は米屋で、小さいカンヌキのかかる一間巾の二枚戸の路地をはさんで、片側のうどん屋。それが私の家だった。

路地の門限は夜十時。朝は一番に出る者が自由に開けた。米屋は宵が過ると、直ぐに戸をたてた。夜の遅い私の家が毎晩カンヌキを下す役だった。長屋の連中で夜の遅いのがいる。カンヌキが下りていると、私の家を、そつと気を兼ねて、勝手口から路地へ抜ける。中には商売店の素通りは縁起が悪いと、白牆の底を叩いて何かをたべる律氣な客もいた。といつても、そこは長町裏の客、うどんが一杯のかまくらをすすって帰るのが関の山だ。かまくら。知つての人は少なからう。ざつくに言うと、うどんの台抜き、つまり汁だけということ。東京のそば

つゆ、あれである。きつね五銭、うどん三銭、かまくら一杯一銭であつただらうか、忘れた。一寸したじ（醬油）をたらしして、ネギと七味を利かすと、冬場は寒さ凌ぎの茶碗酒代り、結構身体を暖めて腹の足しにもなつた。マッチ工場で、張り方さんの女工が、二三時間の残業手当もきつね一杯でパーになる。きつねをかまくらで暖めて、紅や白粉代を浮す奇特な女工さんもいた。天ぶらの揚げ玉、煮汁をとつただしがらをとって置いて、かまらの客に一寸、一つまみか二つまみ浮かすと、相好を崩して喜んでくれた。

当時、借屋問題を巻起したアナキスト辺見直三の古本屋が、近所にあつた。大杉栄や、荒畑寒村も時折顔を見せたりしい。特高の手入れは伯終だった。最初は物珍らしさで市がたつた。が次第に近所も馴れっ子になつた。五六人が一斉に店に踏込む。奥から引立ててきた。アナの連中に捕縄をかける。運送屋が荷物に縄をかける様子を馴れたものだった。見る毎、刑事が面僧かつた。



日本橋筋一丁目が五丁目まで。それから長町六丁目になって、長橋まで七八九丁目と町名がつづく。恵美須町交叉点、一寸斜に正面通天閣があつて、名物のビリケンがお立だ。四師団長寺内寿の父で、陸軍大臣寺内正毅にそっくりだった。

今の西側一高速道路入口に、大阪齒科医専門学校があつた。出前を手伝つて父と一語に学校へ行つたら、紅白の幕が張つてあつて、何か式日らしかった。演壇に一人の老人が一席弁じていた。何の話かチンブンカンブン。只、口調の変つていたのを覚えてゐる。

「……あるんであるーんで……ある」

二度駄目を押して、グイッと大きな口をへの字に結んだ。

「あれが大隈はんやで……大隈重信や」

父は憑かれたように、一人で上ずつていた。

探検記に、下谷の万年町で、大皿に盛つた牛の下を、大人は飯代りに、子供も菓子代りに、との一節がある。多分牛の舌(ターン)の事だと思ひ。牛肉は上、中、並と言つた。その下が、我々が専ら愛好する「潘航艇」、つまり波(並)の下である。上手い洒落だ。それ以外はモツ(臍物)で、一般的ではない。ホルモンとして用いられたのは十三年前からで、モツの中でも舌だけは味が淡白

が出る。始めは月並みな決り文句だった。

「このの氏子のガキ共は、お社さんに小便をかけくさる。

今にチンボが取れるぞー」

とか、

「女共までが、玉垣をへし折つてカンテキの薪にさらす！

この罰当り奴ー」

ここらまでは無難だが、

「人の目は胡魔化せても、〇〇稲荷大明神のお目は胡魔

化せんぞー」

ハッタとにらまれてか、病気の亭主を看病しながら手仕事に励んでいた貞女の鑑が、隣家の男と通じていると白状したり、

「この長屋に、お上の物を盗む大それた奴がいる」

言下に、砲兵工廠に十年動続の工員が、毎日の弁当の空箱に真鍮のダライ粉をつめて盗んでいた事を自供したりして、思わぬ幕切れにならぬ一幕もあつた。

「誰ぞに……頼まれてんでー」

「預けた奴て？ どいつやろ」

当時はそう言つていたようだ。その人柄がそう言わせた。小さい子供が一人いた。連雀に子を背中にしげりつけて、朝早く夫婦で、本町辺の間屋街で古縄を集めて来る。セッセと二人でなよつては、長い縄にして、玉にし

なので、大人にも子供にも向いた。長町でも、西側では網で焼いて売つていた。牛の下が牛の舌なら、東西の話が合ひ。

今一つ食べる話。

冬になると煮凍り屋がくる。木津か黒門市場で仕入れたマグロやサバのアラを、セラチンを加へて煮込む。その煮汁を餅箱に張つて、寒気に晒す。凍つたのを、角に切つて売つてくれる。之も五厘か一銭であつた。朝方は湯気のたつた味噌汁で、なんていうのは、長町裏では夢のまた夢。せめて温かい飯に煮凍りをまぶして食ひのが賢か。その煮凍りの中に、切身のカケラでも入つていたら、舌でまろめて、時をかけて喉を通した。

日掛一銭、月掛三十銭と克明に貯めて、年に一度、初午から、二の午、三の午の稲荷祭りが、長町裏の唯一の法楽だ。この日は長屋は総休み。手入れの届いた旗や昇りを派手に飾りたてる。太鼓を引き廻すには路地は狭い。大人は女連中の手作りパイを、子供は善哉、カス汁にお供への菓子や果物を待つ。席次第は、先ず稲荷下げの婆さんが、白のミコ姿で永い祝詞の後で神がかりになる。祭壇の生アダや生大根をバリバリかじる。中には座つたままで一米も飛上る。腰から上を白のよりにまわす。とに角、度肝を抜いて置いて、お告げなる御託宣

て荷造屋に持つていく。それで細々と生計をたてていた。女房が売つた縄を買つた客が、縄を解いたら、五円、十の札がゾロゾロ出てきた。驚いて警察へ届けると、直ぐ偽造紙幣と判つた。夫婦は早速調べられたが、子供もあることで、女房は一足早く掃宅を許されたが、その晩、子供を圧殺して、自分もくびり死んだ。警察の方針が、世間の同情からか、この話はヒソヒソの内に済んだ。風の噂も残らなかつた。

今一つ、今も伝えられる長町裏の賈い子殺しである。

一人暮しの老婆が、浮世の子(表へ出せない子)をわずかな養育費を取つて、次々に近所の井戸へ妨り込んで、殺していた。養い手の娘が過労で死んだ。寄辺のない老婆が、一人で生きる道としての方法がこれであつた。余りの悪臭に、井戸をさらえたら、水子の死体が何体も上つてきた。老婆の犯行は直ぐに知れた。当時の大阪の新聞はさし絵も入れて連日報じた。井戸は早速つぶされた。井戸から人魂が出るとか、赤子の泣声があるとかが高かつた。永い間たつて、小さい地蔵が建つた。誰か上げるのか、何重にも首にかけられた「よだれかけ」の赤い色が目に残つてゐる。

日本橋筋四、五丁目の両側を、火傷の上皮でもひんむくと何があるか。表筋とは似ても似つかぬ長町裏の夷体



がのぞける。

タツバの低い、片流れの長屋。たまた中二階の家はあつても、二階建てはない。長屋の行詰りは、便所かお稲荷さん。その代り入口の片側には必らず井戸。人一人通れる抜裏がおのずと迷路をなしていて、賭博のバラシ（手入れ）や、喧嘩相手の逃場になっている。

やけにマッチ工場が多くて、次は下駄、鼻緒を造る家だった。マッチ工場のせいでもないのに、失火、放火も多かつた。

貧しい、無力という点では、釜ヶ崎と同じだ。社会から弾き出され、招かれざる客であることも同じ。然し、長町には釜ヶ崎より一呼吸だけのゆとりがある。日常生活にも隙がある。逃場がある。

見まい、聞くまい、言うまい。釜ヶ崎には孤独の原則がある。長町裏にはそれが無かつた。